



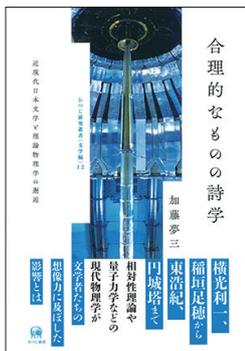
ひつじ研究叢書（文学編） 12

合理的なものの詩学

近現代日本文学と理論物理学の邂逅

加藤夢三 著 定価 5600 円 + 税

近現代日本文学の書き手たちは、同時代の理論物理学やその周辺領域の学知に、どのような思考の可能性を見いだしていたのか。「合理」的なものの見方を突き詰めていたはずの作家たちの方法意識が、時として「非合理」的な情念へと転化するのはどうしてなのか。その総合的な表現営為のありようを検討することを通じて、モダニズムの文芸思潮から今日のサイエンス・フィクションにいたるまでの芸術様式の系譜を再考する。



ひつじ研究叢書（文学編） 11

太宰治と戦争

内海紀子・小澤純・平浩一 編 定価 5800 円 + 税

2019年6月19日に生誕110年を迎えた、小説家・太宰治（1909-1948）。その創作期は、満州事変から、日中戦争、太平洋戦争を経て、戦後占領期に重なる。本書は、戦争から太宰治の生きた時代と作品を捉え直すことを目指し、共同研究「クロニクル・太宰治と戦争 1937 - 1945」、「太宰治と戦争」の関係を多角的に再考する研究論文11本とコラム2本を収録、新たな研究の視界を切り拓く。執筆者：滝口明祥、野口尚志、井原あや、松本和也、吉岡真緒、斎藤理生、大國真希、内海紀子、長原しのぶ、小澤純、平浩一、五味潤典嗣、若松伸哉



ひつじ研究叢書（文学編） 10

小説とは何か？ 芥川龍之介を読む

小谷瑛輔 著 定価 5600 円 + 税

もっとも有名な純文学賞の名が芥川賞である通り、芥川龍之介は文学の象徴のような位置にいる。しかし彼の作品はそもそも小説なのかと当時から疑われ続けてきたのであり、むしろ小説の安定性を脅かす危険な存在でもあった。本書は小説という制度を疑い、そうした懐疑を文学的リソースとしていった芥川作品を解き明かすことで、言葉とは何か、小説とは何か、小説を書く人間の知性とは何かを自己言及的に問い返していく営みとしての小説のあり方を提示する。



ひつじ研究叢書（文学編） 9

村上春樹のフィクション

西田谷洋 著 定価 5200 円 + 税

小説にとどまらず、エッセイ、ルポルタージュ、評論等多彩なジャンルにおいて様々な活躍を見せる現代日本文学を代表する作家・村上春樹のフィクションの様相を、短編小説を中心としつつ、それ以外のジャンルのテキストにも目配りしながら、物語論とイデオロギー批評を始めとする諸理論にもとづき、〈修辭的構成〉〈物語と主体性〉〈物語性と視覚性〉〈倫理とイデオロギー〉の四つの部立てで論じる新たな村上春樹研究。



近代芸能文化史における『壺坂靈験記』

生人形から浄瑠璃、そして歌舞伎・講談・浪花節へ

細田明宏 著 定価 7800 円 + 税

漫画に見られる話しことばの研究

日本語教育への可能性

福池秋水 著 定価 5000 円 + 税

蚕と戦争と日本語

欧米の日本理解はこうして始まった

小川誉子美 著 定価 3400 円 + 税

江戸語資料としての後期咄本の研究

三原裕子 著 定価 8800 円 + 税

小説を読むための、そして小説を書くための小説集

読み方・書き方実習講義

栗原文和 著 定価 1900 円 + 税

語りの言語学的／文学的分析 内の視点と外の視点

郡伸哉・都築雅子 編 定価 4000 円 + 税

江戸川乱歩新世紀

越境する探偵小説

石川巧・落合教幸・金子明雄・川崎賢子 編 定価 3000 円 + 税

『君の名は。』の交響

附・『シン・ゴジラ』対論

志水義夫・助川幸逸郎 編 定価 1500 円 + 税

〈ヤミ市〉文化論

井川充雄・石川巧・中村秀之 編 定価 2800 円 + 税

徳田秋聲

紅野謙介・大木志門 編 定価 2000 円 + 税

近 日 刊 行

中高生のための本の読み方

読書案内・ブックトーク・PISA型読解

大橋崇行 著

女性たちの物語

女性作家・児童文学・教科書教材

西田谷洋 著

小劇場演劇とは何か (仮)

後藤隆基 編

ゼロからはじめる哲学対話

哲学プラクティス・ハンドブック

河野哲也 編 得居千照・永井玲衣 編集協力

発話の権利 (仮)

定延利之 編

認知言語学と談話機能言語

学の有機的接点 (仮)

中山俊秀・大谷直輝 編